■ 続・らくだ日記（百三）　佐怒賀正美 ■

## 北極や無垢の白夜の凍て徹る　石原八束

（昭和四十六年作・句集『高野谿』所収・東京美術刊）

**わが泊つる森のホテルの白夜なる　山口青邨　昭２～４**
**寝しづみし白夜の屋根のこふのとり　石原舟月　昭３６**
**火を焚くや白夜の森のバラライカ　有馬朗人　昭６２**
**帆船にムンクの貌のある白夜　石原八束　昭５８**

人間の記憶とは頼りないものである。三年前、俳人協会の秋季俳句講座（動画配信）で『私の現代俳句～師から学んだ季語など』という講座をさせていただいたが、その折に石原八束や有馬朗人の二人の師から深く学んだ季語の一つとして「白夜」を採り上げた。

その際、晩年の八束が『白夜の旅人』に結びついた白夜行の大きな動機は、父親の石原舟月が生前七十歳の折に試みた船での世界一周の中で白夜の句を詠んでいたことにあるのだろう、と思い込んでいたふしがある。

それも間違いではないが、今回『高野谿』を再読しているうちに、すでに八束は昭和四十六年に北欧を含めた初めての欧州の旅に出ていて、その帰路、北極回りの旅客機の中で「白夜」を観ていた事に突き当たった。その時は、冒頭の句と**〈北極の未明凍光青むまで〉**を詠んでいる。どのくらいの時間どのくらいの範囲の白夜体験かは不明だが、この時すでに広大な白夜をはるかに俯瞰していたのだ。

晩年の『白夜の旅人』の契機は、はじめは父・舟月の晩年の北欧詠への共感と思慕にあったかと思われたが、案外八束自身の欧州旅吟の帰路の風景にあったのかもしれない。

一般に『高野谿』の評価は、**〈風の穂のしらみて凍る高野谿〉**、**〈仁王の眼を啄木鳥（けら）がたたけり高野谿〉**など、「高野谿」に展開した諸作の幽玄諧謔の世界に対して為されているが、この句集は、八束にとっての初めての海外吟を世に問うた場でもあった。必ずしも成功例ばかりとは言えないが、改めて百三十余句を再読されるのもお勧めしたい。

次回は『黒凍みの道』に入りたい。

## 浦かけて寒風山のしぐれ虹　石原八束

（昭和四十六年作・句集『高野谿』所収・東京美術刊）

寒風山に海際から時雨虹がかかっているという簡潔な風景ながら、海の奥行きが背景に省略されて、深々とした一幅の絵のような句。寒風山の「寒風」は季語ではないが、引き締まった空気感が文字づらから伝わってくる。「しぐれ虹」のしっとり感も美的感覚と共に心地よい。

この時期には、〈雲切れて寒風山のなぐれ雪〉〈虹あをき寒風山の雪起し〉の句も詠んでおり、寒風山は八束にとって象潟などと共に、執着のある山であったのかもしれない。ただ、この二句はやはり「寒風」と「なぐれ雪」「雪起し」が厳しい気象を引き合わせただけのようにも見える。

「寒風山（かんぷうざん）」は、秋田県男鹿半島東部にある標高三五五メートルの成層火山。古くは「妻恋山（つまこいやま）」あるいは「羽吹風山」とも呼ばれていた。一八一〇年と、一九三九年に大地震が発生しているが、現在は、ジオパークとして観光名所にもなっているようだが、八束が訪ねた頃は遥かに見わたす八郎潟は干拓中であったか。

ともあれ、「しぐれ虹」という季語がしっかりと据えられている句である。「虹」は夏の気象現象でもあるが、特に日本海側では晩秋から初冬にかけて「時雨虹」がしばしば見られるとのこと。日本気象協会のサイトによれば、この時期には、冬型の気圧配置で細かい雨雲が流れ込みやすく、雨や雪が降っているすぐそばで日が差すことが多く、それでよく虹が見られる、とのこと。また、冬は太陽高度が低いことも虹が見られる条件の一つでもあるらしい。

ところで、「時雨虹」が詠まれるようになったのは、割合最近のことであろうか。『角川俳句大歳時記』（二〇〇六年版）には〈頂きは雲に溶けゆく時雨虹　山内遊糸〉〈しぐれ虹二つ目は藍濃かりけり　大石悦子〉〈片脚を湖に堅田の時雨虹　杉山恵子〉が例句に引かれている。インターネットで検索しても、〈時雨虹心に茱る明るさよ　稲畑汀子〉〈時雨虹突きぬけて行く祝ぎの座へ　稲畑廣太郎〉〈しぐれ虹くぐりて越の国に入る　豊田都峰〉などが二〇〇〇年あたりの出典になっている。その意味でも八束の「時雨虹」は現地に足を運んで得た、早い時期の作と考えてよいだろう

## ■続・らくだ日記（百一）　佐怒賀正美　■

### 抜けるように奈落まぶしい人といて　高岡　修

（「形象」二〇二四年七月号「卵闇（たまごやみ）」八句より）

今月号の高岡氏の主幹巻頭句はどれも独自の詩的把握でたいへん惹かれた。高水準だが難解ではなくするりとさえ書かれているような錯覚を覚える。しかもさりげなく書いているように見えながら、一句独立のための詩の要（かなめ）は押さえて独自の感覚を嚙ませている。上掲句は発表された八句の第一句だが、まずは残りの七句も引いておこう。

**〈水滴を思想としたる人が来る〉〈海鳴りを隠して人とすれちがう〉〈陽炎が野の涯てで生む卵闇（たまごやみ）〉〈陽炎の骨を組み立てかける鍵〉〈どしゃ降りに本屋の二階の森で会う〉〈精神科の空で澄み切る水すまし〉〈罪状を語りつくして夕焼ける〉**である。本屋の二階の句で少しホッとするが、シュール的イメージをも含むこなれた現代詩的な俳句である。

上掲句、この「奈落」は名詞ながら、従来の正統的な用法ではない。従来の使い方ならば、やや無理すじを承知で文脈を作れば、「抜けるように（深い／透く）奈落（が見える／ある）／まぶしい人といて」などの読みとなろう。だが、この句の場合は、最近の若者などが「とても」や「超」などの強調語に代えて「神」や「鬼」を用い、「マジで神旨い」「鬼かわいい」などと使うように、名詞の「奈落」を副詞的に大胆に流用したものであろう。

となると、この句は「抜けるように」「奈落」のそれぞれが「まぶしい」を修飾するが、他方「抜けるように（深い）奈落」の読みもさらりと匂わせている。

この自由な誇張法を含んだ文体にはいかにも作者らしい柔軟性を感じる。昔の曲を引き合いに出して恐縮だが、本来は「君の瞳は10000万ボルト」の「10000ボルト」の強調度がさらに「奈落」へまで飛躍したような衝撃を与えるはずだが、この句でも表面的な表情はつるりと親しい。

ここからは勝手な個人的なヨミだが、恋心の芽生えなのか、一緒にいるだけで心洗われるような美しい人なのか。ともかく、純真な心の目に見える「神うつくしい人」や「鬼かわいい人」はかくも輝かしく出現するのだ。ただ、その純情ゆえの先には奈落よろしきふか～い陥穽もさらりと待ち構えている（かもしれない）。

しかしながら、この句は冒頭でも述べたように、「奈落」という本来ならば凄絶な語を用いていながら、一読したときには句の停滞を寄せず、つるりと句のリズムに乗って句に流れていく。「奈落」が重くならなかったのは、若者の日常的な新しいことばの働かせ方を生かしたからであろうか。まさに俗を詩に転じ切った現代俳句だ。現代詩人でもある高岡氏の俳句の瑞々しさを見た八句であった。

■ 続・らくだ日記（百）　佐怒賀正美 ■

## 黄河秋聲その漣のその延々　董振華

（句集『静涵』所収。二〇二四年六月・ふらんす堂刊）

董振華さんは一九七二年生まれ、中国北京出身。略歴は句集奥付に譲るが、一九九六年慶応義塾大学留学中に金子兜太について俳句を学び始めた。現在、「聊楽句会」代表、「海原」同人。日本での暮らしも長く、通訳や翻訳でも活躍されている。各句には中国語訳が付いているが、いつか董振華さんによる中国語の音韻を聴いてみたいものだ。

少々横道に逸れるが、氏は別に大著『語りたい龍太　伝えたい龍太』も刊行された。飯田龍太は、私が学生の時最初に私淑した俳人でもあったので、こちらもうれしい。

本題に戻ると、本句集は第五句集。私自身は特に次の三句に特に共感した。まずは、**〈路地裏に父の激励梅雨の月〉**の句。都会の梅雨の月に、昔ふるさとで激ましてくれた父を思い出したのであろうか。こんな「路地裏」での父の激励もなかなか味がある。作者の心の視線に沿った励まし方ができる父親だったかも。恩師の兜太も杏子もこの「月」かもしれぬ。

また、**〈開拓者のごとくに秋のやち坊主〉**の句は、「やち坊主」の語に注目した。「やち坊主」は釧路湿原（＝谷地）などに叢生する人の頭めいた形の不思議な植物。カブスゲやヒラギシスゲなどのスゲ類だそうだ。上へと育つ根茎が、冬の土壌凍結と雪融けの流水の影響を受けて、奇怪な形になるものらしい。他方で、ヤチボウズは泥炭地開拓の入植者にとっては厄介な存在だったらしい。その厄介モノだったヤチボウズが、いまは開拓者の一団のように見えるとは、歳月を介して諧謔に転じた。一見ユーモラスながら、開拓に従事させられた民たちの影も底に流れている句。

ところで、冒頭掲出の句は、漢詩感覚が俳句の文脈とバランスを取りながら適度に調和している。上五の「黄河秋聲」の凝縮性の確かさに始まり、連体詞「その」を重ねながら「秋聲」が「漣」を介して「延延」と広がる奥行き感を醸し出して行く。ふつうならば、「その」をこのように重ねるのは冗長となりがちで推奨されないかもしれないが、この句では自然に細やかに地平を拡げているように感じられる。名詞の「漣」、形容動詞的な「延延」と言葉の性格を変えながら句を塗り拡げているのが手柄であろう。黄河の「黄」と秋聲の「聲」という、色と音の交響の奥行きを楽しめる句でもある。

他には、**〈鷺一羽その全景の晩夏なり〉〈夏の鹿白雲一朶ほどのピュア〉〈燕の子濡れた目で見よこの世界〉〈霜晴れをせり合う羽根の眩しさよ〉〈空をゆく天馬のように秋思かな〉〈秋天や黄河一面に横たわる〉〈杏子先生一周忌〉　念深し彼岸も春の東雲に〉**などに深く心が動いた。これからも俳句をはじめ日中の文化の交流に尽力されることを心より願って筆を措く。

■ 続・らくだ日記（九十九）　佐怒賀正美 ■

## 筆を持ち　立たんか短歌と　念じれば

### 宇宙の果てが　われに舞い降り　紫　虹

（『立たんか短歌　這い這い俳句』紫虹：二〇二四年・冨岡書房刊）

著者のまえがきで、著者の紫虹さんは、五年ほど前にステージⅣと宣告され、以来、病床でなしていた短歌や俳句を「形に残せるものなら」と出版にすることを決断されたと記す。「夫っと」である島一木のあとがきには、「傍らのベッドに寝ている妻が、突然叫び出すのである。歌を歌いだすときもあれば、短歌や俳句らしきものを大声で叫ぶこともある」とあり、本集については「ベッドの上での生活を余儀なくされた妻の、その時々の叫びの記録である」と記す。前半が短歌集、後半が俳句集である。

一見すると大人の言葉遊びやダジャレのような印象を受けるが、読み進めていくうちに、闘病生活の逆境を跳ね返す、肝の据わった笑いの落差に引き込まれた。島のあとがきを再度引けば「駄洒落や語呂合わせ、掛詞から果てはシュルレアリスムの自動記述めいて、どこへ展開してゆくかわからない可笑しみがある」。

俳句よりも短歌の方が可笑しみが襞の深さも含めて深く柔軟に伝わってくる。本集には、上掲の〈筆を持ち〉のひらかれた想像力の笑いから、**〈洗濯機　誰がタブーを　犯したの　私の下着に　夫のマスクが〉**の卑近禁忌の笑いまで、作者の笑いは多種多様である。その両極の間に、**〈子宮経て　卵巣・リンパ・横隔膜　体内ツアーの　行きつく先よ〉〈「おかやん」と　オレオレ詐欺の　アホやんが　うちはずっと　ママと呼ぶやん〉〈鹿が来て　歯科医の前で　転がった　死角になって　角しか見えず〉〈病得て　京の都に居を構え　メディカルツアーに　お祭りざんまい〉〈一般に天涯孤独と　言うけれど　天がいいこと　きっとくれるよ〉**など、日々の生活に湧き上がる多面的な言葉遊びをしながら、意識野を広げ、多彩な笑いを振り撒く。私には、あっけらかんと見えるこの多彩な言葉遊びの境涯性の由来の深さに、短歌形式が気さくに応えているような気がした。

一方、俳句の方は、**〈天敵妻　毎晩点滴　まあ素敵〉〈ご覧あれ　鉄アレイ持ち　荒れる夫〉〈鞍馬寺　蛾がのびやかに交尾する〉**などに爆笑苦笑。ただ、七七がない分、展開力の飛躍はいま一つ物足りない恨みもある。

だが、作者は尋常でない日々の病床生活において意識に立ち昇ってくる多種多様な、しかしながら自分の存在理由と接点を持つ言葉と手放しで戯れているように感じる。

そのような中で得られた、冒頭の一首には、短歌を生さんとする自覚に対して、「宇宙の果て」という永遠の不可視の幽霊が舞い降りてきてしまった。そのとき、他の多様の位相の言葉は無尽の星空のように光り合って作者の脳裡に満ちわたるのであろうか。

■ 続・らくだ日記（九十八）　佐怒賀正美 ■

## 倒されしラガー吹雪の底へ消ゆ　阪西敦子

（句集『金魚』所収・二〇二四年三月ふらんす堂刊）

阪西敦子さんの三句組・二九〇頁に及ぶ厚い句集が刊行された。私も驚いたが、第一句集だという。祖母も俳人だったという敦子さんは、七歳の頃「ホトトギス」の生徒・児童の部に投句したところから俳句を開始し、自然に俳句に接し、これまで続けてこられた。この間、約四〇年間。今回の句集には、二年前までの句が収められている。一冊の中に、小学生から今日までの作品をとにかく収めた。阪西さんには、小林恭二の木曜会で句座を共にしたり、NHKカルチャーセンターでお会いしたりするようになってから数年経つが、句会の中ではホトトギスのよい面を吸収してこられたと感じることが多々あった。句集を通読してもその基本的な姿勢は一貫している。日常のありのままをありのままに受け止めて、そのときの心の動きを裏に添わせながら書き記す。

作者には飲食の句が多い。もちろん、酒も楽しくお飲みになる。そんな食生活を楽しみながら、**〈俎板も菜箸もまた独活の香に〉〈いくつかは麺に隠して牡蠣すする〉〈焼芋の大きな皮をはづしけり〉〈寒卵片手に割つて街小さし〉**などの佳品を生む。力んで凝視するのではなく、生活に溶け込んだ視線で自然に観察しているのだ。しかも楽しみながら。

「ホトトギス」の主唱である自然諷詠の作では、次のような句に惹かれた。**〈あしうらをいぶかつてゐる初鴉〉〈光から水へ戻つて春の夕〉〈雨払ふ風となりけり青芭蕉〉〈金魚揺れべつの金魚の現れし〉**など。どれも作者独自の観察眼が光っている。特に、「光から」の句はたいへん省略が効いている。本質的な言葉を選びながら、この春の夕景は大きい。

そして、私が今回新たに注目したのは、人にからんだ句である。**〈人の上に花あり花の上に人〉〈大試験前にいつぺん会つたきり〉〈香水を濃く幻に飽きやすく〉〈受験子のつぎの車両へ移りけり〉〈東京に友人多し絵双六〉**など。多分大切な思い出の一人なのであろうが、「大試験」との取り合わせで詠み込んだ句はないのではないか。東京の友人たちと絵双六を楽しんでいるのだろうが、それぞれの生き方も双六のように波乱万丈。ラグビーがお好きと聞いていたが、実際に選手でもあったとはさらに驚いた。冒頭に引いた句では、吹雪の中で練習や試合をしているのであろう。タックルされて倒れた選手をすぐさま吹雪が呑み込んで消してしまう。そんな厳しい自然環境のなかでもラグビー選手たちの情熱は衰えることを知らない。ある意味で可能性へ賭ける青春の自恃とでもいうべきものが強く押し寄せてくる句だ。**〈ラガー等のそのかちうたのみじかけれ　横山白虹〉**にも劣らぬ名作がこんな形で出てきたことに祝意を表したい。作者のありのままに受け入れた人間の生命感がここに凝縮されているように感じられた。

■ 続・らくだ日記（九十七）　佐怒賀正美 ■

## 死の灰のふる夜甘藍踊りだす　石原八束

（昭和二十九年作・第一句集『秋琴集』所収）

石原八束先生が逝去されてからすでに四半世紀経つ。先生の謦咳に接した方も少なくなってきた。一方で、新しい方もだいぶ増えたので、今年は石原八束先生の句集を新たに読み解く企画を進めたいと思い、さっそく先月号から何人かの同人に順に執筆をお願いすることにした。新しい代表句が発掘されることを期待しながら。

今回の鑑賞の中で、この句を引いて鑑賞されたのは編集長の安達昌代さんであった。俗な言い方だが、「目から鱗が落ちた」思いであった。以下に、鑑賞文を引いてみよう。

「『死の灰』は雪のようにどこからか降ってくるのではない。言うまでもなく、人の手によって原子爆弾から放たれた放射性物資である。その灰を浴びた畑のキャベツが、死のダンスさながらに暗闇の中で蠢きだす様はシュールレアリスムの世界観を彷彿とさせる。

キャベツは昔から欧米に於ける多産のシンボルとして、葉の重なりから赤ん坊が生まれるという逸話を持つ。（中略）同句集の〈原爆地子がかげろふに消えゆけり〉が失われた命に向けられたものなら、掲句は未来の命に注視していると言えるのかもしれない。」

このキャベツは歳時記に従えば夏（初夏）の季語になるが、本句では季節感よりもその奥に込められた暗喩的な生の意味が引き出される。もとより、キャベツは夏でも冬でも春でも出回っているし、畑にはいつの季節でも育っている。私の生活感からはむしろ夏の季節感は薄い。

それはともあれ、「甘藍躍りだす」はもちろん実際にはあり得ないことで、作者の意識にひらいた超現実のカリカチュア的な風景だ。生命の危機感が臨界点を超えて、一気に狂の世界へ脱け出そうとしているようでもある。市井に出回っているキャベツは一、二枚の葉でくるんだつるんとした一個が多いが、畑のキャベツは葉脈の浮き出た外側の大きな葉が幾重にも包んで野性的ですらある。本句では、畑に何百と犇めくその多数の命が、正気を忘れてしまったように踊り始めてしまうというのだ。

提示された超現実的な虚の風景を暗喩あるいは意識変容の産物として、自然に受容された安達さんに改めて感心した。天上の八束先生も微笑んでおられることだろう。改めて、この句を『秋風琴』の代表句に加えておきたい。

■ 続・らくだ日記（九十六）　佐怒賀正美 ■

# 遠逝を生きて今此処大花野　救仁郷由美子

（「豈」66号特集「救仁郷由美子全句集」）

救仁郷由美子氏は一昨年七十二歳で逝去された。「豈」での安井浩司論に惹かれていたのだが、今回「豈」誌上での「全句集」によって、作者の俳句を見渡すことが叶った。

出発点は日常生活の哀歓に始まり、子どもを含む懸命に生きる者への共感、そして社会批評・人間批評と多様で、切実な心情が独自の認識と現代詩的文体で読者に届く。

たとえば、日常生活であれば、〈相槌に愛の破片の寄せ木あり〉〈さびしくて野分きと交わす叫び声〉〈記憶燃え狂った春を待つ私〉と心情を造形化して強く訴える。

子どもの句では、〈子は眠る明日は幾重も与えたし〉に始まり、〈青野走る殺しかけても児は走る〉という異様な明るさをはらむ愛情句まで詠む。児は懸命に喜々と生きのびる。

社会・人間批評句では〈何は無しプルトニウムと地獄絵師〉の諧謔、〈風を描く愛から遠いいあんふの指〉〈プライドを異臭の衣込め宿なき人〉など社会的弱者への共感。そして、昨今のガザを思わせるような〈虐殺逃れ少女の飢餓よ日輪よ〉は、叫びに近い強烈な救済への祈りでもある。

句集の途中からは、（おそらくは闘病の）内心的風景句が増えてくる。〈脱髪の脱身心や水面の月〉〈遁れ端の痛みは白き曼殊沙華〉〈僻んだ心痛み痛みて満月よ〉〈羨めば醜い貌鳥捨て往こう〉など心との対話を独自のイメージに結ぶ。〈怖いと泣く子どもじぶんの子守唄〉に至っては、恐怖心に対して泣き叫ぶしかない。その泣き声は幼少の時分の子守唄の記憶と重なりながら、やがて泣き疲れて寝落つ。

もう一つの主題は、それらと無縁ではない「生と死」。〈垂直に流るる現世死の水平線〉〈萩の野に生酔無死の小屋一軒〉〈水包む少年のうつぶせのゆらめき〉〈生と死と虹はその色分けにけり〉〈さくらちる雨滴はげしき泥の川〉など。形而上的な捌きもあるが、現実へ引き寄せたイメージ構成には、深い思索性を備えた独自の美意識をも見る。

冒頭の句はこの流れの中に入るであろう。作者は「遠逝」という疑似彼岸の世界を生きてきて、今ようやく「此処」である現世の「大花野」に辿り着いたと。その終末意識には、芭蕉の枯野句とは対蹠的なベクトルを見る。不思議な幻想的実感とでも言いたい時空の終着点として、作者は此岸の「大花野」に救済されたのであろうか。〈葉桜の木の間漂う宇宙母顔〉という不思議な句と併せて、作者の宇宙意識を垣間見た気がした。

■ 続・らくだ日記（九十五）　佐怒賀正美 ■

## またたきに律あり呂あり寒昴　檜山哲彦

（合同句集『塔　第十一集』）

昨年十一月に「りいの創刊十五周年記念祝賀会」にて久闊を叙したばかりの檜山哲彦氏が十二月三十日に逝去された。七十一歳は早すぎた。いまは、神保町「銀漢亭」での「白熱句会」に同席できたご縁に感謝するのみ。作者は昭和二十七年広島生まれ。ドイツ文学者であり、また俳人として沢木欣一「風」を知る貴重な一人でもあった。

第一句集『壺天』（平成十三年）では、大方は素朴な客観写生から〈恋の鴨雀を池にはたき落とし〉〈幹ぢかに花を噴き出す老桜〉〈シュトルムの杯にとびこむ金の蜂〉〈霧吐いて霧に埋もるるライン河〉〈水母といふ一氷片を手渡さる〉〈青嵐や百穴の向きてんでんに〉などを得ていた。

また、第二句集『天響』（平成二十四年）では、〈桃の実のまはりやまずよ富士の水〉〈花穂高くおほばこ風を見つけたり〉〈月の蝕毛虫の糞のふとかりき〉などの客観的写生に加えて、主観を加えながら〈冴ゆる夜の天地すれあふ音すなり〉〈吹きやみの風をさがすよ子猫の尾〉〈日の落ちて匂ひのほそし春の風〉〈大蚯蚓伸びては雲を奔らする〉〈風すすぎ鴨の声まつすぐに〉〈風青くちぎれて蝶を生みにけり〉などこの句集の中核ともいえる上質の感覚句を得る。五感を駆使し万物照合的な広やかな世界を現出した。動物が活躍するのも氏の作風の特色。加えて、〈金目鯛まるごと煮たる明るさよ〉〈マント脱いで花束贈呈といふ大役〉〈ぞんぶんに伸びて四温の猫となり〉などのユーモアも味があり温かい。良質の抒情句と言えば、〈星合の空をあふれて風降るや〉〈帰り来て木犀の香の髪ふるふ〉〈流れ星見て来し眼うひうひし〉〈龍天に登るや校歌新しく〉なども印象的だ。

その後の作については次の遺句集を待ちたいが、最近の作からは、〈鯉の子に鯉の貌現れ木の芽風〉〈寝よゆれよ白鳥大いなる卵〉〈浪に削げ巌の貌なる鬼虎魚〉〈鳥渡る天に親波子波かな〉〈まづ尻を試し寄居虫をさまりぬ〉などの観察と共に時に大胆軽妙な俳諧への捌きなどに唸った。

上掲の句は、寒昴の星の光の視覚的なニュアンスを、「律」「呂」という音への広がりを持つ語で表現した。言葉の引き寄せ方に作者の心が映っている。合同句集に載せた「天空たかく心をひらき」という自己紹介のエッセーにも、作者の抒情の在り方を改めて思った。各論はまた別日に綴りたいが、まずは何よりも衷心からご冥福を祈る。